

深草の野邊の櫻し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

〔書言字考節用集六生植〕雲珠櫻城州鞍馬名

〔大和本草十二花木〕櫻略○中

鞍馬ノ山ノ雲珠櫻トハ、藻鹽草ニウズハ、カザリ鞍ノ具ナリ、ウス櫻トヨメルモ、クラマノ山ニソ
ヘタルナリトイヘリ、ウス櫻トテ別ニ櫻アルニハアラズ、順和名ニ雲珠爲飾未詳、和名字須、

〔還魂紙料上〕秋色櫻。

俳諧をもつて其名を知られたる秋色は、江戸小綱町菓子屋の女なり、幼名を阿秋といふ、十三歳
のとき上野の花見にまかりて、清水堂の邊、井の端にありて、大般若といふ櫻を見て、井のはたの
櫻あぶなし酒の醉と口すさみぬ、玄かりしよりその櫻を秋色櫻といひけるよしは諸書に載て、
たれくも知るところなり、其刻の老樹は枯たれど、今も其跡に糸桜を植て秋色櫻といふ、觀音
堂の辰巳にて、側に井あり、井は御供所とかいふ所の板桓の裏なり、昔は此垣無かりし故か、
發句をなしたるなるべしと思ひをりしが、つらく考れば此説おぼつかなし。

〔古今要覽稿草木〕右衛門櫻。

武藏國豊島郡柏木村に立所なり、楊貴妃の變種とおもはるれども、莖の下にむかふを異なりと
す。

右衛門櫻之由來

抑このさくらは、長元年中ゑもんの佐源頼季朝臣勳功の賞に此地を給らせ給ひ、こゝに御館を
いとなみ住せ給ひし比、家門繁榮の兆を見せよと、御手づからひとへのさくらをうへさせられ
しに、その花八重をはじめて咲出けり、是よりして深く此樹をめでさせ給ひ、春ごとに花の宴遊
をそ催されける、其後百六十餘歳をへて、江戸民部大輔頼介、當寺再興のみきりゐかきをなし、一